

ハツカドール 私たちど
こでも誰でも扱わせま
す！

ショックラン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

パーソナルエンタメAIとして、悩める人類を撈らせる為に開発された「ハツカドル」

そのハツカドルでもある1号、2号、3号。しかし彼女たちはぐうの音も出ないポンコツさ加減により、度重なる失態を次々とかましてしまう。彼女達のポンコツぶりにブチ切れた0号は、これ以上の失態を続けられればデリートもあり得ると宣告する。

さすがに危機感を覚えた三人はいつにもまして気合いを入れて仕事をこなそうとするが……

「さあ！ 行きますよー！ 2号、3号ちゃん！」

「あつ。スマホ忘れちゃった。1号ちゃんちよつと待って」

「メドイ〜・・・」

いきなりグダグダだが、はたして彼女たちは立派な「ハツカドール」として勤めを果たせるのだろうか。

目次

プロローグな一幕	1
黄金色のハツカモザイク	4
黄金色のハツカモザイク 2	10
黄金色のハツカモザイク 3	14

だが、当人達は……

「2号ちゃーん！　へーい！」

この元気にバトミントンのラケットを降る金髪の彼女は1号。メンバーの賑やかし担当のような感じ。ポンコツである。

「はーい。アレ？」

1号が打ったシャトルを空振りおっぱいがそれに合わせてぶるんと揺れるピンク髪の彼女が2号。メンバーのお姉さんの存在。ポンコツである。

「……zzzz」

ソファの上に身体を沈めて眠っている青紙の子供っぽいのが3号。どっからどこを見ても女の子だが、男だ。男の娘である。ポンコツである。

「おい、お前らー！」

この辞令を知らないとはいえあまりにも危機感がない三人を見てイライラが蓄積された0号はつい声を荒げて三人を呼ぶ。急に呼ばれた1号2号はバトミントンを止めてその場で固まり1号の頭にシャトルがコツンと当たる。3号も今の声でノソノソと起きる。

何だ何だと頭にハテナマークを浮かべたような顔した三人に、0号は辞令を目の前に見せつける。三人は辞令書と0号の顔を交互に見ると、マジ!?　って顔をする。

「その顔はちゃんと理解したって顔だな」

コクコクコクと三人同時に首を縦にふる。まるで壊れた赤べこのようだ。

「では、もう一度言っておく。これ以上の失態をすればお前たちは間違デリートいなく消去される。それを防ぐ為に今一度、地上に行って人間を撈らせろ！ 質問はあるか!?」

「はい！ 質問です！」

青い顔をした1号が震えながら手を挙げる。それを見た0号が顎で質問を承諾する。
「あと、何回失敗できますか!?!」

とんでもなくズレた質問をした1号に肩をガクツと落とす。だが、すぐに立ち直り、
「0回だバカ」

と一言告げると、三人をモニターへ蹴り込んだ。

黄金色のハツカモザイク

「カレーン、重大発表ってなに？」

目は青でウェーブのかかったツインテールをした金髪の小さな女の子が、同じく金髪のロングヘアーでややツリ目な灰色の瞳をした女の子に話しかける。

その二人を恍惚とした表情で片手に通訳の参考書を片手に持つて見つめるおかつば黒目の女の子がいた。

「フッフッフッフ。アリス、しの、それは後の祭りデース」

ドヤ顔で人差し指を立てて左右に小刻みに振る。

「祭りじゃくて、踊りだろ〜カレーン」

「・・・楽しみよ陽子」

濃い青髪のツインテールの女の子と茶に近い赤髪のショートヘアと八重歯が特徴的な女の子がカレーンのセリフにツツコミを入れさらにツツコミを重ねて教室に入ってくる。

「OH！ あややに陽子やつと来たデスネー！」

今回、カレーンに呼ばれたメンバーは明日のテスト勉強のついでにカレーンの重大発表と

いうやらを訊く為に忍の部屋に集合することになっていた。そして、綾と陽子が来たことで全員揃ったみたいだ。

待ちわびたぜ！　とでも言わんばかりの顔でカレンが立ち上がる。四人は顔だけでカレンを追う。

「ジャジャーン！　コレが私のニューフォンネー!!」

カレンのジャケットから今最新の極薄スマホが登場する。このスマホはどこでもつながり今までにない楽しいを提供するをコンセプトに売り出されたもので、大人気であり手に入れにくい代物なのだ。それを見た陽子と綾は「おお！」と感嘆の声を漏らす。アリスと忍は今一凄さが伝わらなかつたらしく頭にハテナマークが浮かんでいるような表情をする。

「スゴイじゃんカレン！　コレ今なかなか手に入らないやつだろー!」

テンションを上げ上げの陽子の言葉に右手を頭でさすりエへへと照れるカレン。

「でも、本当にコレどうしたの?」

「いや、何か『色々セリフを録音させて欲しい』って言われて、引き受けたらソレくれましター」

「なにそれ!!　こわい!!」

綾と陽子が息ピッタリのツツコミを入れてる横で、忍は参考書を見ては逸らし、見て

は逸らしを繰り返していた。

「シノそれ新しい通訳の本？」

「そうなんですよ。コレお姉ちゃんが買ってきてくれたんです」

忍がアリスに参考書の表紙を見せる、そこには『こけしでもジャンジャンバリバリ英語脳』というタイトルに金髪のこけしが表紙のど真ん中に写っていた。

（イサミ・・・どういふつもりで買ってきたんだろう？）

「で、効果はあつたのか？」

陽子は笑いながら訊くと、忍は小さく「うっ・・・」と唸ると、参考書を机に置く。その顔はどこか悲哀の表情をして窓の外の晴天の青空を見上げる。

この時点で四人は、あーあんまり効果出てないんだなあと心が一致する。

「しのは英語を頑張ろうって思うだけ偉いわよ。それよりも陽子は明日の中間テスト大丈夫なの？」

綾が横目で陽子に問いかける。そう言われた陽子はふつと目を落とすと無言で綾に近づき両肩に手をかける。

（ええええ!!? よよ陽子の顔がこんな近くにいいい〜）

突然の出来事で顔を赤らめてアタフタとする綾の顔をジッと見つめる陽子。

「私もヤバイ!!」

「……ま、まぎわらしいのよ!!」

「痛い! 何で!？」

ヤバイの言葉を聞いた綾は、一呼吸置いて陽子の背中を結構強めに叩く。

この状況を見てたカレンは何か思い出したかのようにスマホを弄り始める。

「どうしたんですかカレン。突然スマホを取り出して」

「せっかくだから、このニューフォンを使って勉強するネー!」

新しく手にいれたスマホをどうしても使いたかったらしく、パツパツとスマホの画面をスライド操作をする。

「おおくなんかカッコイイよカレン!」

「確かに何か様になってるよな」

「キャリアアウーマンって感じね」

「カレンのOL……」

忍が妄想に浸り腑抜けた顔をする一方、カレンも褒められてスマホを見ずに操作をする。そののせいか、おかげかカレン自身も一度も試したことのないアプリを起動させてしまう。

「わわっ! 私のニューフォンが光ったデース!」

スマホの画面が強烈に光だし、ひとりでカレンの手を離れ宙に浮くとそこから三人

の女の子が輩出される。

「いたた・・・、こんな乱暴に放り込まなくても・・・」

「怒っていたからね。あんな質問をすればしようがないかもしれないわね・・・」

「んぐーっ！ もが・・・ごぐ・・・!! ...っ！ ...」

スマホから現れた1号、2号、3号。だが、蹴り込まれたのが原因で着地に失敗して組体操が崩れたかのように体勢になっており、3号は2号の胸に押しつ潰されて窒息寸前になっている。

突然現れた三人に呆然としてしまう忍たちに、何事もなかったかのように立ち上がり、

「私たちは、パーソナルエンタメA I・・・ハツカドル！ 私たちが来たからにはマスターのアレコレ撓らせちゃいます！」

「そして、私がハツカドル1号！」

「2号です」

「・・・」

3号の声が聞こえてこなかった為、1号が肩を掴んでガシガシ揺らす。

「もー3号っ！ ちゃんとやってよー！」

「さ・・・さ・・・う」

ガクリと息絶えた3号を見てようやく頭の処理が追いついたのか陽子が口を開く。

「こ、コレが最新の機能かスゲー・・・」

「いや違うでしょ!!」

綾の今日一のツツコミが部屋に響いた。

黄金色のハツカモザイク2

綾のツツコミで全員それなりに冷静になったのでハツカドールについてアレコレ説明を受けていた。

「つまり、ハツカドールは私たちの悩み事とかを解決して捗らせてくれる存在ってことね」

「そうです！ さあ、何でも言ってくください。捗らせちゃいますよー！」

1号が胸を張って宣言するのを、ウズウズしながら忍が手を伸ばして1号の髪の毛のトングの部分を触る。

「わわつと！ いきなりどうしたんですか!？」

「アリスやカレンとはまた違うタイプの良い金髪ですなー」

忍が1号とじやれつくのをどこか納得のいかない表情をしたアリス。それを2号が陽子を見て説明を目で訴える。

「ああ、しのは重度の金髪オタクだからなあ」

「ええ!? 私ってそんなに金髪の子に見境いなく見えますか!？」

心外だと言いたそうな顔をするが、手は1号の髪を撫でるのを止めない。

「いや、今現在の状況を見るとそうとしか見えないんだけど・・・」

陽子の言葉にアリス、カレン、綾がウンウンと頷く。

「いえいえ、いくら私でも金髪の好き嫌いぐらいあるんですよ」

「金髪に好き嫌い？」

「初耳だよお」

2号とアリスが首をかしげる。それを見た忍はハッと、慌てた顔をする。

「大丈夫ですよアリス。アリスやカレン、1号ちゃんのように純金髪美少女は別格なので何があっても嫌いになつたりしませんので！」

「じゃあ、どんな金髪が嫌い何ですか？」

忍の手からようやく離れられた1号が質問をすると、右手を顎に乗せて少し考える素振りを見せる。

「そうですねー。強いて言うなら『中途半端に黒髪を残した金髪染め』ですかね」

「確かに金髪2黒髪8の人とか街で見かける事もあるわ」

「中途半端って事だと金が取れて微妙に黒髪が戻るのもアウトか？」

綾と陽子の言葉に大きく頷く。

「アレ？ でもシノ前に金髪に染めようとしてなかったっけ？ ……似合わないから

絶対にやらなくてイイけど」

最後の方の言葉は忍に聞こえていないようだ。

「はい言いましたね。でもあの時は、金髪に染める事にたいしてまだまだ覚悟も勉強も不測してました。徐々に金色が抜けて黒に戻ってしまるのは私にとっても不本意です。だから・・・」

少し溜めて語気を強める。

「アリスかカレンの髪を私に移植する案を提案します!」

忍の自信満々の提案を聞いた直後、カレン未だ気絶している3号以外の全員が二歩ほど後ずさる。

「怖いよ! 突然ホラーな話に「しないでください」するなよ!!」

1号は髪をおさえ、陽子は忍を指差して怒鳴る。

「そうですか? 私は色落ちしない金髪を手に入れる。カレンかアリスとは髪を通じて永遠に繋がる。・・・Win—Winです」

先ほど読んでいた参考書を開きWin—Winのページを開き皆に見せる。

「んなわけあるか!!それに・・・」

力強いツツコミをいれる陽子だったが、キューーンと妙な音が耳に届き言葉を止める。

今まで黙りを決め込んでいた3号が、右手に回転したドリルと左手にハンマーを持ち

白衣を着て立っていた。

「じゃあ、帰りたいからさっさとやろう・・・」

「え！ ちょよ!? えええええ！ どうなってるのコレ!?!」

よく見ると3号の顔に斜めの縫い跡っぽいシールが貼ってあり隣の2号は黄色い服と赤のオーバオール、四つのリボンを付けて立っていた。アリスは手術台にベルトでぐるぐる巻きに捕まっている。

「うわキツ・・・ってストップストップ！ 3号、2号！ 何をしてんの!?!」

3号を羽交い締めにする1号。

「もう、夜も遅いし帰りたいんだよ。これが捗りたい願いでいいじゃん」

「いや、いい訳ないでしょ!?!」

「オー、アリス！ ショッカーになるデスカー!?!」

カレンがショッカーポーズをとり、綾が吹き出す。アリスは1号に救出され、忍はへアカタログを眺め、2号は鏡を見て小さくまだイケると呟いている。

「何だこれ・・・」

あまりにもカオスな状況で陽子は溜め息を吐く。

黄金色のハツカモザイク3

「だあああつ!! もう何なんだこの無駄な時間は!？」

陽子が今現在のカオスな状況にシャウトする。

「だいたい、アリスの髪をしのに移植したらアリスが尼さんになるだろ!!」

「はっ!」

しまったと驚いた顔をする忍。そして、そのままアリスを抱き締める。

「ごめんなさいアリス! 私が間違っていました。確かに金髪は欲しいですけど、アリスがハゲになるのは駄目です!!」

「大丈夫だよシノ。私はハゲになつたりしないから」

「そうデース。ハゲは駄目なのデース」

「うんうん。ハゲにならざる心を通して深まる友情、美しイイね」

「・・・君たちハゲハゲ連呼するのはやめない?」

熱いハゲデイスに3号が冷や汗をかきながら苦言を呈する。

「それより、本当に拂りたい依頼ってなんなの?」

2号の改まった質問に対して、綾が慌てて教科書を取り出す。

「テストテスト！ 私たち、しのの家に来たのはテスト勉強をしにきたのよ！ もう、明日まで時間もないじゃない！」

「えくよりもよつて勉強〜？ 面倒だからアニメ見ようよ〜」

テレビのリモコンを取り電源をつけようとする3号だったが、ダメですの一言で綾に主電源ごと切られる。

「じゃあ、4話目にして遂に私の最大の特技を披露する時だね！！ 【成分分析っ！】」

「……成分分析？」

決めポーズを取りながら、五人をじっくり観察する1号を見て忍、アリス、綾、陽子、カレンが首を傾げる。

「成分分析は、皆の身長、体重、趣味や能力に苦手科目、隠し事なんかも分析できちゃうのよ」

「プライベートの侵害も甚だしい能力だな!？」

2号の説明にツツコミを入れる陽子。そうこうしている内に分析が完了したのか目をシパシパさせながら1号が息をはく。

「わかりましたっ！ おもに【英語】がヤバいみたいですね。次点で【数学】」

おおーっと五人から感嘆の声がもれる。実際、忍、陽子は英語はまずいし、カレンも微妙に下がってきている。綾、アリスは数学が若干下がってきてるのを見破れて驚いて

いる。

「じゃあじゃあ、その分析結果で私が将来通訳者になれるか分かりますかー？」
ピシッと表情が固まる1号。だが、すぐに忍の手を握り暖かい笑顔を向ける。

「わ、私は未来は不確定な物だと思っんです。ハアイツ！」

上ずった声が余計に悲しい。そんな光景である。

「と、とにかく赤点だけでも回避しないと！」

なんととも言えない空気を察してアリスが口を挟む。

「ん、でも勉強してると意識が飛ぶのですが〜」

「あー分かる分かる！ アレ何なんだろうな」

「不思議だよね。僕も0号の説教が気づいたら終わってたりするし〜」

忍と陽子それに3号が勉強あるあるで盛り上がる。

「それ知らない内に寝てるだけだよね!? 後、3号は確信犯だよねそれ！」

1号がツツコミを入れる中、綾が溜息をついて教科書を置くと、忍と陽子に心配そうな顔をする。

「二人共寝てる余裕ないでしょ。こないだも赤点ギリギリだったじゃない」

うぐつと声を合わせてへこむ二人。だが、忍は胸に手を当てながらすぐに立ち上がる。

「綾ちゃん私の座右の銘を忘れたのですか。そう！ ケセラセラ『なるようになるですよ〜』」

「なっていないでしょうが!!」

机をそれなりに強く叩き、忍の8点と書かれた英語の小テストを握り潰す綾。ちなみに、50点満点です。

しかし、皆このまま一夜漬けをやっても正直どうにもならないだろう・・・と諦めかけた空気になる。

「ワタシに良い考えがありマース！」

そんな暗い空気を打ち壊す様にカレンが元気よく手を上げる。

「おっ、何か良い勉強方でも思いついたのか？」

「何か準備が必要なら私達に言ってくださいいねー!」

「アヤヤのテストを後ろや横から覗くデース」

全員フワフワと想像してみる。綾の横の人は横目にテストを覗き、後ろの人は身を乗り出してテストを上から覗き込む・・・陽子を。

「それはダメなんじゃないかしら〜・・・」

「ちよつと待て！ 何でイメージ映像が私なんだよ!!」

2号が柔らかな口調でダメ出しをし、陽子が全員の悪意ある想像にツツコミを入れ

る。

「あうう……このままじゃシノがまた赤点とつちやうよお……」

アリスが震えながら頭を抱える。そんな中で3号が数字の掘られた鉛筆をドヤ顔で皆に見せるが、ちらつと見られただけで、何事もなかったかのように華麗なスルーを全員からくらい、orz状態になる。

「こうなったら最終手段しかありません!」

「やん♡」

1号が2号の胸に手を突っ込み、インカムを取り出す。

「何ですかそれ?」

「コレは【超記憶一夜】です」

超記憶一夜……インカム型の記憶増幅装置。ポンコツ三人が、ロクに依頼内容を覚え脱線する事が多かった為、0号に持たされた装置。

長期の記憶は不可だが、名の通り一夜漬けの為だけにある装置である。

「物は試しです。付けてみてください!」

1号が素早く忍の背後にまわり、頭にインカムをセットする。

その瞬間、バリバリつと雷が走ったかのように全身が震える。

心配になったアリスが忍の顔を覗くとかつて見た事ないほどキリツとした顔になり、

まるで、東大だろうが何だろうが受かりそうな雰囲気を纏った顔になり、気のせいかな絵柄も変わる。

(出来る女みたいな顔になってるー!?)

綾・陽子が心の中でツツコミを入れる。そんな二人を尻目に忍が単語帳をパラパラと一読する。

「アリスさん。適当に単語問題を出してみてください」

「う、うん。じゃあ・・・」

アリスもパラパラと単語帳を開く。

「activity」 「活動」

「difference」 「違い」

「fact」 「事実」

「truth」 「真実」

アリスの出す単語に間髪入れずに日本語で返す忍。普段だったら絶対にありえない光景に三人は感嘆の声をもらす。

「・・・ねえ2号。超記憶ア一夜つて僕たち様に造られた道具だけど、人間が使っても平気なのかなあ〜?」

「た、多分大丈夫じゃないかしら?」

驚く三人とは別に二人はヒソヒソと不穏な話をしていた。

「それ、私も貸してくれよ！」

「ワタシも天才になりたいデース！」

「ちゃんと全員分ありますよー！」

「私は遠慮しておく・・・」

「シノー！ カムバーク！ なんかついからー！」

陽子・カレンがノリノリで装着して、忍同様バリバリと雷に打たれる。途端に二人は、イケメンへと早変わりすると、問題集を超高速で解き始める。

「うわーっ！ 二人まで絵柄が変わったー!!」

あまりの状況の速さについて行けず涙目で叫ぶアリス。

「うおー！ スゲー！ テスト内容が次々と頭に入ってくるぞー!!」

「頭が熱いデース！ ハッ！ これが、知恵熱っ・・・！」

更にペースを上げて問題を解き、教科書を読み込む三人。

「お二人もどーです？」

未だ受け取らない二人に対して、一号は「超記憶一夜」を進める。だが、アリスは首をブンブン横に振り拒否の姿勢を見せ、イケメン化した陽子に見惚れてた綾もハッと意

識が戻る。

「わ、私も遠慮しておくは・・・」

「よおし!! コイツがあれば、明日のテストは間違いなく満点だあー! 皆で百点取るうぜー!!」

超記憶一夜を付けた三人は肩を組んで、おおーつと雄叫びを上げて訳の分からない団結をみせる。

「じゃあ、私たちはもう帰るな。ハッカドールありがとなー!」

「また、明日デース!」

「じゃあ、アリス・・・頑張つて」

未だイケメン状態の忍をチラツツと見てから、綾はアリスにエールを送る。

「それじゃあ、私たちもお仕事完了ですね」

「そろそろ寝ないとお肌が悪いしね〜」

「超記憶一夜、明日になったら自動回収されるから好きにしてイイヨ〜」

ハッカドール達もカレンのスマホから帰る準備を始める。

「ええっ!? 皆帰っちゃうの! 待つてえ! この状態のシノと二人つきりは嫌ああああ!!」

夜の闇夜にアリスの嘆きが虚しく響いた。

超記憶一夜は確かに便利な道具だ。しかし、ハツカドール用である為、人が使えば記憶に全ステを振ることになり、身体の抵抗力が低下し謎のキャラ変や、テンションの暴走が起こってしまう。

だから、忍達は見事にインフルエンザにかかったのだ。

「こんの・・・バカどもがあ!!」

「うわあ! 二人共逃げはなっ?」

三人は般若のような顔になった0号から逃げようとしたが、長時間の正座でまともに立てなくなっていた。

「二アッー!!!」

ちなみに、一夜漬けでしかない記憶は休み明けで行われた別室のテストでは効力を発揮しないばかりか、ソレ頼みだった為三人は華麗に赤点を取りました♡

今回の総合評価・・・大失敗【あと数回大失敗を取れば彼女たちは容赦なくデリートです】